



TITLE:

OE Apollonius of Type

AUTHOR(S):

佐々部, 英男

CITATION:

佐々部, 英男. OE Apollonius of Type. 英文学評論 1971, 27: 1-15

ISSUE DATE:

1971-03

URL:

https://doi.org/10.14989/RevEL_27_1

RIGHT:

OE *Apollonius of Tyre*

佐々部 英 男

1

英語史の各時代を通じて、同じ内容が比較される文献としては、先ず福音書を挙げ、ついでポエティウス「哲学の慰め」を推すが、常識であろう。この二書とは異なり、逐語的な比較は不可能であるが、古英語（以下 OE と記す）、中英語（ME）、近代英語の各時代に、同一テーマが扱われているユニークな作品として、アポロニアス物語を逸することは出来ない。

ユニークという形容詞は、この物語のとくに OE 散文訳には、幾重にもあてはまるであろう。紀元三世紀頃ギリシャ語で書かれたオリジナルは今日紛失しているが、それにもとづくラテン語の物語 *Historia Apollonii Regis Tyri* は、中世に大流行し、ヨーロッパの殆んど各国語に訳されている。特に「この物語が著しい展開をとげたのは、英国においてであった。」^①

しかも十一世紀中期の OE 散文訳は、当時の唯一の文学的な世俗物語である。当時の散文は、大体宗教的、教育的意図で書かれたもので、もしこの物語が残っていなかったならば、十三世紀ロマンスの流行に先立つ約二世

紀前に、既にこのような物語への愛好心——即ちロマンス文学の下地が存在した事実を見逃すかも知れない。事実、OE 訳は唯一の写本 *Corpus Christi College, Cambridge, MS 201* によって伝わり、後半はかなり脱落している。

舞台も「ペーオウルフ」などの北欧ゲルマンの世界ではなく、地中海のギリシャ世界である。オーディン、ソールの神ではなく、ネプチューン、アポロ、ダイアナへの言及が見られる。もっとも訳者は明らかにキリスト教徒で、これらの神々は異教の神としての役割を果しているに過ぎない。

物語の重要な要素として、世俗的愛が織りこまれているが、これもOE文学ではユニーク^⑤といって差支えないであろう。冒頭に登場するアンタイオカス王は、英文学史上、始めてincestを犯した人物^⑥であり、ペンタポリスの王女アーケストラテは、「英文学史上、始めて恋に陥った女性である。」^⑦へ恋に陥る^⑧というような表現がOEにあったかどうかは、後ほどふれる。

このOE訳と以後の英訳との間の直接の影響関係は不明である。しかし「ジェスタ・ロマノールム」に収められたラテン語の物語には、いくつかのME訳があり、ガウアーの「恋人の告白」第八巻の散文物語はもっとも影響が大きい。エリザベス朝になると、ロレンス・トワイン (Lawrence Twine) の散文物語などがある。シェイクスピアの「ペリクリーズ」は、主人公をアテネの政治家に^⑨ちなんだ改名しているが、トワインなどの筋にしたがい、コーラスにはガウアーを登場させている。更に主人公と上述の王女との間の娘も、海上で生れたため、「ペリクリーズ」ではマライナ (Marina)^⑩と改名されているが、十八世紀の劇作家リロ (Lillo) の *Marina* にひきつがれ、二十世紀 T・S・エリオットの詩 (一九三〇年作) の題名にもなっている。

シリアの王安タイオカス (Antiochus) は、後に先立たれたが、信じられぬほど美しい娘 (ane swiwe wlinige dohter ungelifedlicre fægernesse) があつた。彼女が婚期 (gifeclire yldo) に達すると、引手数多で、王はあれこれと嫁ぎ先を考える。思案するうちに、王自らが父親としての務めを忘れ、彼女に道ならぬ慾望を抱くようになり (gefeol his agen mod on hyre lufe mid unrihtre gewilununge) 、“わが娘を自らの配偶者として (him to gemaccan) 求めるようになる。慾望を押えきれず、ある朝早く彼女の寝間に入り、内密の話をするふりをして、側仕えの者を遠ざけ、逆らう娘を腕力で押えつけ、邪淫 (mānfullan scilde) を満たしてしまう。結婚前に汚された王女は、一度は死を願うが、乳母のすすめもあつて、王の意に添うようになる。王は世間にたいしては娘の良き父 (arlast fader) 、“内輪では自らの娘の夫 (his agene dohter wer) という関係を続けるため、求婚者たちはこの incest を織りこんだ謎 (rædels) をかけ、謎をといた者もとけぬ者も一様に殺して、首を門の上にならべる。この近親姦は物語の発端に過ぎないが、OE の訳者、さらに中世の人々の関心を惹いたと思われる。OE の他の作品と同じく、はつきりした題がついていないこの物語は、ラテン語訳では「タイアの王安ポロニアスの物語始まる」という書出しであるが、OE 訳では「邪悪なる王安タイオカスとタイアの王安ポロニアスの物語ここに始まる」(Her onginæd seo gerecednes be Antioche Pam ungesæligan cingce and be Apollonige Pam tiriscan) となっている。とくに「邪悪なる」(ungesæligan) という印象は、この物語につきまといつたらしく、例えばあれほど種々の物語を利用したチョーサーも、「法律家の話」の Introduction で、

Tyro Appollonius,

How that the cursed kyng Antiochus

Birafte his doghter of hir maydenhede,

That is so horrible a tale for to rede,^②

Whan he hir threw upon the pavement.^③ ll. 81—85.

とこつとそれ以上ふれていない。

いさ一つ、謎 (rædels) についつての説明が必要であろう。この言葉自体 OE 以来の語であるが、古英詩集 *Exeter Book* に九十五篇の謎詩が収められていることから、謎にたいする興味が窺われる。OE の訳者は、まずラテン語をそのまま引用し、ついで英訳している。

Scelere uereor, materna carne uescor. Quaero patrem meum, meae matris virum, uxoris meae
matris virum, uxoris meae filiam nec inuenio.

Scylde ic polige, moddrenum fæsce ic bruce. Ic sece minne fæder, mynre modor wer, mines
wifes dohtor and ic ne finde.

われは罪に苦しみ、母の肉を味う。

わが父、わが母の夫、わが妻の娘を求むれど、見当らず。

およそ明白な謎というのは矛盾であるが、謎の含む本質的曖昧さは、古来翻譯者を悩ませてきたことであろう。

この場合も、OE 訳にいたるまでに、かなり曲解され、更にガウアー、シェイクスピアでは或程度のずれが見られる。Peter Gooden によれば、この謎のポイントは^⑧ father=father-in-law, mother=mother-in-law, etc. といったふうに、近親関係をあらわす語を、例えば実の父親の意味と義理の父親の意味をからませることによって成立したと思われる。OE 訳前半のわれ (ic) は王を指し、「母の肉」というのは、娘の夫すなわち son-in-law としての王の立場から、妻の父親の配偶者すなわち mother-in-law としての王女の肉体を意味する。後半の「わが父、わが母の夫」は王女の立場からの言葉であり、「わが妻の娘」は当然王の言葉である。主語の不統一はオリジナルからのへだたりを示すものであろう。

本筋にもどって、求婚者の一人に非常に富みかつ聡明な (swiðe welig and smotor) タイアの領主アポロニアスがいた。自らの智慧 (smotornesse) と学識 (ða boclican lare) をたよりに、海を渡ってアンティオカイア (Antiochia) を訪れ、型どおり謎をかけられる。正しく解き明かすが、王は認めず、三十日の期限をつけて再考を促す。アポロニアスは一たん帰国するが、身の危険を感じ、小アジアのターサス (Tarsus) に逃れる。果して王は家来サリアーカス (Thaliarcus) を、刺客として送ったのであった。ところが、サリアーカスがタイアの町に着いてみると、町中が悲歎 (morcnung) と号泣 (ormate wop) に包まれている。人々は髪をそらずに伸ばし (unscorene and sidfeaxe) 芝居 (walorican plegan) も中止し、浴場 (baðs) も閉鎖していた。芝居というのは、ラテン訳では publica spectacula となっており、厳密な芝居ではないかも知れぬが、そのようなたぐいは当時の英国には存在しなかったであろう。浴場は Baða が古来有名である。様子を尋ねてみると、市民の愛するアポロニアスがアンティオカイアから戻って以来、行方不明だという。サリアーカスは喜び帰り、王に報告する。その時の王の返事を引用しよう。

Fleon he mæg, ac he ætfeon ne mæg. ^⑧

「逃げることはできても、逃げ去ることはできない」といった意味で、ラテン語の ‘Fugere quidem potest, effugere non potest’ の直訳だが、現代英語ではこのようにうまくゆかないであろう。更に王はアポロニアスを生け捕りにした者には、金五十ポンド、首を持参した者には百ポンドのほうびというふれを出す。

一方、アポロニアスの赴いたターサスは、烈しく酷しい飢饉 (pone heardestan hungor and pone reðestan) に見舞われており、人々の目の前には死が迫っている。身をかくまってくれることを条件に、アポロニアスは船で運んできた小麦を与えて、ターサスの恩人になる。市民たちは感謝のしるしに青銅の像をたてたが、右手で小麦を差しだし、左足でます (mita) をふみしめていた。しかし、ターサスの滞在も数ヶ月で打ち切り、キレナイカ (リビア) の町ペンタポリス (Pentapolis) に向う。

船は順調に進むかと思えたが、突然の暴風に遭って難破する。このあたりの描写を引用してみよう。

pa weard ðare sæ smilnesse awend feringa betwux twam tidum and micel reownesse aweht,
swa þæt seo sæ cnyste þa heofonlican tungla and þæt gewælc fara yða hwaðerode mid windum.
partocæcan comon eastnorðerne windas and se anglislica suðwesterna wind him ongean stod and
þæt scip eal toberst.

二刻^{twam}のうちになぎは突然変じて、大嵐起り、海原は天の星と接し、波のうねりは風とともにとどろいた。更に北東の風が吹くと、恐しい南西の風がむかえうち、船は真二つに裂けた。

唯一人ペンタポリスの海岸に泳ぎついたアポロニアスは、ネプチューンよ、汝はアンティオカス王よりも残酷だなどと、歎いている。その時親切な漁師が通りかかって、家へつれ帰り、食物を与えただけでなく、自分の着物を半分に裂いて一方を与え、昔の身分に戻ったならば、わしのことを想い出してくれと頼んで、町への道を教える。

町の門を入ると、油を身体に塗り (mid ele gesmerod)、タオルをまとい (mid scian beird)、一種の運動具 (まり?) を持った若者が、通りを走りながら、浴場の開いたことをふれている。アポロニアスも裸になり、浴場に入って、人々を眺めるが、自分に匹敵する体格の者はいない。猶その前に、ラテン訳ではオリブ油 (liquore palladio) を使ったとあるが、OEの訳者は省いている。そこへ、その国の王アーケストラテス (Arcestrates) の入場となり球 (odon) 戯が始まる。アポロニアスはこれに加わり、走っていつて球をとり、素早く王に打ち返すなどして、王の注意を惹く。球戯のあと、OE訳ではアポロニアスがこま (top) を廻すことになっているが、これは誤訳で、巧な手先で王に一種のオイルマーサージをすると、王は若返った気分になった (se cynge waes gepuht swiþe he of yld to iugude gewend ware)。すっかり気に入った王は、広間での祝宴 (gebeorscipe) にアポロニアスを招く。最初のうちは、わが身の不幸を想って打ち沈み、身の上話を語り終ったときには涙を流す (him feollon tearas of ðam eugum) 有様であったが、やがて王女アーケストラテ (Arcestrate) のとりなしで、財宝も得られ、ハープと歌の技倆をひれきすることになる。頭に花輪をのせ、手にハープを持った姿は、アポロニアスではなく、異教徒の神アポロかと思われた (þe nære Apollonius ac þæt he wære Apollines ðara hæðena god)。「異教徒の神」という説明はラテン訳にはなく、OEの訳者がキリスト教徒としての立場からつけ加えたものであろう。猶、ラテン語の lira (lyre) を hearpe (harp) と訳しているが、ハープに合せて歌うのは、キャドモン

以前のからのアングロサクソンの習で、「*メーオウルフ*」を連想させる「*hearpan sweg*」「*堅琴の響き*」という句がここでも使われている。

このように諸芸にひいでているのを知って、王女の心はアポロニアスを愛するようになり (*gefeol hyre mod on his lufe*)、祝宴の後、約束どおり、金二百ポンド、銀四百ポンド、多くの高価な着物と二十人の召使いを王から貰いうけて彼に与え、再び会えぬことを恐れて、宿舎の世話もした。

しかし、アポロニアスへの愛に燃えた王女は、眠られぬ夜を過した (*ƿæt mæden hælde unstille niht*)。このあたりの描写は、*courtly love* を経たガウアーでは大いに敷衍されている。

Thenkynge upon this man of Tyre

Hir herte is hot as any fyr,

And other while it is a-cale;^②

Now is she reed, now is she pale,

Right after the condicioun

Of hir ymaginacioun.

.....

She stant for love in swich a plit

That she hath lost al appetit

Of mete, of drynke, of nyghtes reste,

As she that not what is the beste.

II. 575—590.

夜が明けるや、父王のもとへ行き、アポロニアスを自分の家庭教師として抱えてくれるよう説得し、アポロニアスもこれに応じた。

その後間もなく、王とアポロニアスが通りをつれだつて歩いてみると、三人の教養もあり生れもよい男 (*þi gelæde weras and æpelborene*) がやってきた。いずれも長い間、王女に求婚してきた若者である。三人は声をそろえて (*togedere ante stæfne*) 王に挨拶した。王はにっこりして (*smecode*)、*「何用か」*と尋ねると、一人が云うには、*「長い間、娘御を懇望してまいりましたが、はっきりしたご返事がいただけません。今日こそは我々三人のうち誰を貴方の掣 (*pe to aume*) にされるお積りか伺いたい」*という次第。王 *「生憎、娘は勉強に忙しいのだが、貴公の名前と (彼女への) 結婚の贈り物 (*hire morgengifte*) を手紙に書いて下さい。そうすれば娘に手紙を渡して、彼女自身に扱ばせましょう。」*

若者たちは云われたとおりにし、王は手紙に封印して (*geinsegode mid his ringe*)、アポロニアスに託した。やがて王女は手紙に目を通すと、アポロニアスに向つて云つた。

「先生、私がこのようにして掣えらびをしても、お気にさわりませんか。」

「いや、むしろ貴女が私から学んだ知識によつて、貴女自身意中の人を手紙に認められるのを喜んでいくくらいです。どうか貴女ご自身が希望されるところで、掣えらびして下さい。」

「まあ先生、もし私を愛していらいしやつたなら、心配されるでしょうに。」

このようなやりとりの後、王女は返信をしたためるが、王女の感情がよく表われていると思うので、原文を引

用する。

'þu goda cyngc and min se leofesta fæder, nu þin mildheortnesse me leafe sealde þæt ic siliſt mooste ceosan hwilcne wer ic wolde, ic secge ðe to soðan þone forlidenan man ic wille, and gif ðu wundrige þæt swa scamfæst fæmne swa unforwandigendlice ðas word awrat, þonne wite þu þæt ic hæbbe þurh weax aboden, ðe nane scame ne can, þæt ic siliſt ðe for scame seegan ne mihte'.

立派な王であるわが最愛の父上様、お情深くも、私自らが望む相手を選んでもよいとのお有しを賜ったからには、正直に申し上げますと、私ほかの難船したお方をのぞみます。かく恥じらい多き乙女がかく臆面もなくかようなことを書くのを驚かれますならば、私自身恥ずかしくて申しあげられぬことを、恥を知らぬ臆の手紙に託したと覺し召し下さい。

scame (shame), scamfæst (shamefaced) とつた語が、乙女の恥じつゝをよく表わしている。shameの方はガウアーにも見られる。

手紙を読み終った王には、難船した男 (þone forlidenan man) というのがピンとこなかったので、三人との問答がはじまる。このあたりにはユーモアがただよっていて、「英語で書かれた最初のコメディシーン」とも云われている。

王「君たちの誰が難船したのだ。」

男の一人、アーダリアス「私でございます。」

別の男「お黙りなさい。病気に取りつかれてくたばってしまうがいい (adl þe forþime þæt þu ne beo hal ne gesund)。お前さんは私と一緒に勉強したが、私と離れて町の門の外に出たことがないじゃないか。何処で難船したというのだ。」

王は手紙をアポロニアスに渡して読ませるが、自分が愛されているのを知って、顔中真赤になった (his and-wilia eal areodeode)。王は始めて気がつき、「喜べ、喜べ、アポロニアス (Blissa, blissa, Apolloni)」。娘の意志は私の意志でもあるのだ。まことにこのようなことは、神の御意なしには、成立しないものだ」といって、二人は結ばれる。

以下、残念なことに、OEの写本は結びのエフィサス (Ephesus) の場面まで欠けているので、概略を記す。

その頃アンタイオカス王の死が伝えられ、アポロニアスはアーケストラテをたずさえ、アンタイオキアに帰国することになる。またしても嵐に遇い、アーケストラテは船中で女の子を生みおとすや、息絶えたかに見える。悲歎にくれたアポロニアスは、彼女を棺に入れて、船から送りだす。棺はエフィサスに流れつくが、彼女は蘇りダイアナの神殿に仕える巫女になる。

一方アポロニアスはターサスに行き、娘セシア (Thasia) をストランギリオ (Strangulio) ダイオナイサス (Dionias) 夫婦に託し、自らはエジプトに赴く。ところがストランギリオ夫婦には同じ年頃の娘があり、長ずるにつれて、万事が娘よりも秀でたセシアを妬むようになる。揚句の果、召使いの手で彼女を殺させようとするが、海岸であわやというところを、海賊に連れ去られ、ミティリーニの女郎屋に売られる。ところが奇跡的に操をまもり通す。女郎屋で操を守り通す奇跡は、OEの Agnes, Agatho, Lucy といった聖者伝にも見られる^⑧。そうであるが、「ペリクリーズ」では四幕全部が当てられている。

他方、アポロニアスはターサスに戻り、ストランギリオ夫婦に欺かれて、偽の墓に詣り、一たんは娘の死を信じる。後、ミティリーニに赴き、同地の領主アシナゴラス (Athenagoras) の仲介で、娘と再会し、アシナゴラスはセシアと結婚する。[OE写本再び始まる] 夢のお告げで、アポロニアスは娘と聲をつれ、エフィサスのダイア

ナの神殿に詣で、アーケストラテとも再会する。ストランギリオ夫婦は罪状をあげられ、石で打ち殺されるが、ペンタポリスの海岸で裸のアポロニアスを助けた漁師の老人は、金貨二百ペニーを貰い、生涯召し抱えられる。アポロニアスは、以後七十七年間、アンタイオキア、タイア、クレネの王として善政を布き、アーケストラテとの間に男の子ももうけ、艱難の後の人生を幸福と平穩のうちに送った。

三

要するに、近親姦、謎、飢饉、難破、恋、水葬、嫉妬、貞操といった種々な要素を織りこんだ離別と再会の物語であり、舞台もアンタイオキア、タイア、ターサス、ペンタポリス、ミティリーニ、エジプト、エフィサスと地中海各地に及んでいる。物語の巧拙はともかく、波瀾に富んだ筋であることは間違いない。

主人公は運命の糸に操られ、艱難から幸福へと上昇する。運命の観念はアポロニアス以前のOE文学にはつきりとした形で表わされ、「ベーオウルフ」の

Gæð a wyrd swa hio scel. I. 455.

運命は常になりゆくべきままになりゆく。

という表現は、今日も訴える響きをもっている。

MEになると *wyrd* に代って、運命の女神 *Fortune* が登場する。ガウアーがこの物語に *Fortune* を八回も登場させているのは、OE 散文訳に見られない特徴であるが、当然の成行きかも知れない。

最後に、語学的に注意すべき点を列挙する。(引用の行数、頁数は *Gooden* のテキストによる。)

(一) 完了形、進行形が、かなり見られる。

pu hafast nu geedniwod his ealde sar. p. 24, l. 17.

(You have now renewed his old sorrow.)

Da heo þa gewrita oferred hæfde, ða beseah he to Apollonius. p. 32, l. 3.

(When she had read through the letter, then she looked at Apollonius.)

Mid þam þe he ðas pingc eal areht hæfde, Arcestrate up aras. p. 38, l. 4.

(When he had told all those things, Arcestrate rose up.)

þæt word sprang þæt Apollonius hæfde funden his wif. p. 38, ll. 13—4.

(The word spread that Apollonius had found his wife.)

Mid þi þe he þas pingc wæs spreccende to him selfum, þa færinga geseah he sumne fiscere gan.

p. 18, ll. 2—4.

(While he was speaking those things to himself, suddenly he saw a fisher go.)

(二) 与格の副詞句にかんして、新旧両表現が使われている。

Ðæt forscilgode wif þa eallum limon abifode. p. 40, ll. 12—3.

(Then the guilty wife trembled with all her limbs.)

- ③ 厳密にいって、比較的長い前半の断片と、別箇の結末の部分の断片が十六世紀に、Archbishop Parker のコレクションに集められた後、一緒にされたものである。
 ④ 後にされるが、フボロに「異教徒の神」という説明を、OE の訳者はわざわざ加えてくる。更に「mid Godes fulume', 'gefulum·iendun Gode' 'swa swa God wolde' というた語句が使われ、ギリシヤの物語に「Christian element」が見られるのは面白い。
 ⑤ *Wife's Lament, Wulf and Eadwacer, Deor* などの詩に世俗的愛が見られなこともないが、〈恋に陥る〉といった過程としては扱われていない、量的にも僅かである。
 ⑥ *Wulfstan* の *Sermo Lupi ad Anglos* に、当時の英国人の罪状を列挙したくだり、*forleger* (i. e. incest) という語が見られる。
 ⑦ (ed) Peter Goulder: *The Old English Apollonius of Tyre* (Oxford English Monographs), 1968, p. 55. 猶本書の引用はすべてこのテキストによる。
 ⑧ (ed) F. D. Hoeniger: *Pericles* (The Arden Shakespeare), pp. 2—3.
 ⑨ *Pericles* では「三幕三場」「二行と五幕」「場一五八行の二度にわたって」Marina の由来に言及している。Marina の発音については「三省堂『固有名詞英語発音辞典』に *marina*, (in *Shake*) *ma·ri·na*, (*island*) *ma·ri·na*: マリナ」を参照。
 ⑩ rede: read.
 ⑪ この行に相当する描写は、OE 訳にはないが、ラテン語の写本によっては *sed guttae sanguinis in pavimento ceciderunt* (しかし) 血の滴が床に落ちた) という文句があるものと削除されているものとあり、チャイサーの pavement の出所を示している。
 ⑫ cf. P. Goulder: *Antiochus's Riddle in Gower and Shakespeare, Review of English Studies* N. S. VI (1965), pp. 245—51.
 ⑬ *atlfleon* の *at·fl·eo* の異形で、'away' の意味。
 ⑭ a-cale: cold.
 ⑮ not: (he wot) knows not.
 ⑯ cf. Rosemary Woolf: 'Saints Lives' in *Continuations and Beginnings*, p. 61.